虫けらが毒虫になるまで

権力をめざさず、権力をなくす原則

前田俊彦

「現場で悪い肉食べたらしいの」
「うん、きっと汚染した日本人だろ」　パリ郊外で飛行機墜落

1　敗北を恐れる者、恐れぬ者

「むかしはよかった、などというつもりはまったくないけれども、ちかごろの世のなかには道理にかなわぬことがあまりにもありすぎるとおもう。たとえば、いま福岡市の米田団地住民たちが国鉄新幹線の工事現場に団結小屋をつくってすわりこみをしている。これはどういうことかというと、新幹線は団地のどまんなかをとおるようになっており、もっとも近接したところでは住宅と高架線との距離はわずか一〇数メートルしかなく、そのため開通後の新幹線は当然騒音で住民をなやますだろうから、対策として高架線三〇〇メートルの区間に防音ドームを設置せよという、住民側の要求を国鉄が頑固に拒否しているからだ。もちろんこの種の紛争は当節としてめずらしくないのだが、僕が注目したいのは国鉄の態度であって、住民たちのあたりまえの要求を国鉄は〝前例〟がないといって一蹴しているのだ」

話がここまでくるには、多数派の横暴ということについての村会議員の議論が延々とつづいてのことだった。しかし、いつまでたっても結論がでそうにないので、私は話題をかえるつもりでそういう話をもちだした。

「〝前例〟といえば、新幹線で防音ドームを設置した例はないようですね。札幌の地下鉄では地上部分にドームをつけた箇所があるようですけれども、あれはむしろ防雪がおもな目的だときいています」

「国鉄にしてみれば、線路に防音ドームをつけることはたしかに〝前例〟がないだろう。しかし、〝前例〟がないことはしないというのであれば、米田団地の住民たちだって自分の住宅のすぐそばを時速二〇〇キロをこす電車に轟音をたててとおられるのは〝前例〟のないことだろう。だから〝前例〟のない新幹線はごめんだと住民がいっても理屈の筋はとおっている。しかし住民は、新幹線をとおさぬといってるのではなく、ただ十分な防音対策をせよといってるだけなのだ」

「ところが、米田団地住民にとっては〝前例〟のないことでも、国鉄は全国いたるところで住民の反対をおしきる仕事をしているのでして、米田団地住民の要求を無視するくらいの〝前例〟はありすぎるくらいあるでしょう」

「それはそうだろう。だが、そうなると〝前例〟とはいったい誰にとってのものなのか。国鉄は住民にとって〝前例〟のないことを勝手にやるのが〝恒例〟の習慣であり、住民のほうではラジオやテレビの音でさえ近所の迷惑にならぬようにする〝恒例〟の習慣があって、その〝恒例〟のとおりにやることをもとめられた国鉄は〝前例〟がないといって簡単に無視する。こうなるともう、道理なんてものは通用する余地もない」

「でも、住民たちは、なんとしても道理をとおそうというわけでしょう」

「それはもちろんだけれども、無理がとおれば道理がひっこむ習いだから、楽観はできない」

「しかし、そこはいたずらにいきりたってみても勝負にはかてないのですから、できるだけ冷静になる必要があるのではありますまいか」

「君にとっては他人ごとだから冷静になんていえるけれども、本人たちの身にもなってみろ」

「団地住民にいきりたつなといってみても、おそらく通じる話ではありません。でも、わたしたちが団地住民をおもうならば、冷静に、無理がとおるのはなぜであるかをかんがえねばなりません」

「無理をとおそうとしているのは、力だよ。国鉄は力によって、団地住民の要求を無視しようとしている」
「そうです。たしかに力が無理をとおします。いや、力しか無理をとおすことはできぬというべきでしょう。しかし、〝力が無理をとおす〟というときに、〝正義は力なり〟という言葉をおもいだしませんか」
「いや、〝正義は力なり〟ということはいえない。すくなくとも現代では、その言葉が通用しない証拠として力が無理をおしとおしているのだ」
「ところが、〝正義は力なり〟という言葉に、わたしどもはまだいくらかの幻想をもっているのではありますまいか。正義とはすなわち道理であるとしますなら、道理をたゆまず主張しつづけると無理がまかりとおるのをとどめることができると、そう信じている人もすくなくないとおもいます」
「そう信じたい誘惑があることはたしかだな」
「力によって無理がおしとおろうとするのにたいして、いきりたってもしょうがないともうしましたが、〝正義は力なり〟という言葉に幻想をもつということが、要するに人をいきりたたせるのです。いまやわたしどもは、道理というものはけっして力にはならぬことをさとらねばなりません」
「それでは君、国鉄の工事現場に団結小屋をたててすわりこみをする米田団地住民を、あざわらうようなものではないか」
「とんでもない。米田団地住民のすわりこみに意味がないなどというつもりはなく、わたしがいいたいのは、住民たちのすわりこみは力の誇示ではないこと、そして、それが力ではないかぎり権力は排除できないだろうということです」
「なんだって、その理屈はちょっと理解しにくいな」
「例をほかにとりますと、政府の無理な政策に反対してするデモなども、力をもって無理をおしとどめようとするのではないというかぎりで、真に効果的であるといわねばなりません」
「そういえば、いまから一〇年くらいまえ、いわゆる六〇年安保のあとで日本でも非暴力直接行動ということを提唱する一群の人がいた。当時の僕にはその言葉の意味がどうしてものみこめなかったが、いまにしておもえばその思想は、直接行動としてデモやすわりこみ、その他なんでもするけれども、それは力をもって権力に対抗するのではないということのようだ」
「その思想はいまでも、さまざまなところでいきているようです」
「そうかもしれんが、なかなか理解しにくい思想ではある」
「わたしの理解によれば、敗北することをおそれないたたかいが非暴力直接行動の思想内容だとおもいます。そして、権力がたたかいにのぞんでもっともおそれるのは敗北であり、人民がたたかうときには敗北をおそれません。つまり、権力は一度でも敗北すればそれでおしまいですけれども、人民は敗北しても敗北してもたたかうことができるのです。なぜかといえば、人民はつねに絶対少数派であるからです」
「へえ、人民はつねに絶対少数派だというのもげせないが、だから人民は敗北をおそれないとなるとますますわからなくなる」

2　少数派のたたかいは力によらぬ

「七二年ですから一昨年の九月、ベトナムむけの米軍戦車が相模補給廠からでるのを阻止しようと、四人の若者たちが戦車運搬車のま

えにとびこんだことがあります。おぼえていますか」
「おぼえているとも、それがいま公務執行妨害罪かなんかにひっかかって裁判が進行ちゅうだ」
「あの若者たちを、わたしはもっとも具体的な日本人民だとおもっています」
「具体的な日本人民だなんて、それはどういう意味か」
「ほんとうのところは、一億の日本人民はすべて米軍戦車の無限軌道によってふみにじられているといっていいのです。安保条約の実態はそういうものでしかないのですけれども、そういってみてもあまりにも抽象的でなかなか実感がわいてきません。ところが、あの四人の若者たちの行動によって、抽象的にしかいわれていなかった日本人民の姿がきわめて具体的になったわけです」
「そうだろうか。僕はかならずしもそうだとはおもわない」
「さらにいうなら三里塚の百姓たち、沖縄の住民たちは、日本の人民のすべてがたたかわねばならぬことを一身にひきうけてたたかっているという意味で、日本人民のあるべき姿をもっとも具体的に表現しているといえるのではありますまいか」
「なにも僕は軍国主義者ではないし、また現在の政府を贔屓するものでもないから、戦車をとめた四人の若者や三里塚の百姓たちの勇気ある行動には敬意を表したいとおもう。しかし、だからといって、彼らは日本人民のすべてがやらねばならぬことを一身にひきうけてやっている、というのもどんなものだろう。やはり彼らは少数派なのだ」
「そう、彼らはどこまでも少数派なのです。ということは、人民はなんらかの主体的行動をおこすとき、それはつねに少数派とならざるをえません」
「おおくの人民がやりたくてもやれないことをやるのが勇気で、勇気ある人は少数派にならざるをえぬということはわかる。だが、おおくの人がやってはならぬとおもうことをやる人もいるわけで、それは勇気ある人ではなくて異端者なのだ。そして、異端者もまた少数派である。とすれば、勇者と異端者とをどうして区別するか」
「勇者と異端者との区別は重要な問題ですので、あとでべつの角度からかんがえてみたいとおもいます。が、さしあたって米田団地住民の行動は勇者のそれであるか異端者のそれであるか、あなたの判断はどうですか」
「もちろん勇者の行動だ」
「なぜですか」
「だって、時速二〇〇キロをこす新幹線電車が住宅のすぐそばをとおるなんて、その騒音たるやたまったものではないだろう。国鉄のいいぶんによると、米田団地のあたりは終着駅にちかいから電車は低速になって騒音もたいしたことではないそうだ。でも、団地住民が〝そうでございますか〟といってひきさがらないのは、やはり勇気ある行動といっていいだろう」
「ところが国鉄にいわせますと、これまでに国鉄はどこの住民から〝防音ドームをつくれ〟といわれてもそのとおりにしたことがない、その〝前例〟のないことをやれという米田団地住民は異端者だというわけでしょう」
「そうだ。国鉄からみれば米田団地住民は異端者だ」
「してみれば、体制としての国家権力からみれば反逆者はすべて異端者であり、人民からみれば反逆者も勇者でありうるのです」
「勇者でありうるなんて、すこし歯切れがわるいな」
「理由があります」

「そうだろう。だが、その理由はいわなくてもわかっている。たとえば相模補給廠で米軍戦車をとめた四人の若者たち、もし日本人民のおおくが自分たちは米軍戦車にふみにじられているとかんがえているのなら、彼らは勇者とたたえられていい。しかし、もしかすれば大多数の日本人民は米軍戦車の下にではなく上にのっかっているとおもっているのではないか。かりにそうだとすれば、もはや四人の若者たちは勇者どころか異端者なのだ。というわけで、反逆者もときには勇者でありうるというふうに、かるくいっておかなければならない」

「早合点をなさってはこまります。日本人民は米軍戦車の下にしかれているか上にのっかっているかの議論はしばらくおき、国鉄が米田団地住民の要求を〝前例〟がないといって無視する背景には、日本人民のすべては新幹線電車の上にのるのであって、その下に居住している人民はごく少数だというかんがえかたがあります」

「いわゆる公共の利益を優先させるという思想で、三里塚の百姓たちも飛行機の下になる少数派で、多数派である日本人民は飛行機の上にのるというかんがえかただ」

「ところで、いったい公共の利益とは何かということが、これまでに世間でもずいぶん問題になったことがあります。しかし、わたしが残念におもいますのは、そのばあいの利益とは御利益にすぎぬということにたいていの人がきづいていません」

「そうか、御利益か。観音様にまいれば御利益があるという、あの御利益だな」

「飛行場をつくれば、新幹線をとおせば、米軍の核戦力にたよれば御利益があると、それが国家権力のいう、公共の利益優先の思想なのです。しかしながら、御利益の思想がいかに人民を腐敗させるものであるかは、その思想の根底には人を無為におくものがあるからです。具体的にいいますと、飛行場はおれたちがつくるのではない、新幹線はおれたちがつくるのではない、侵略されてもおれたちがたたかうのではない、しかし、それからの御利益にはあずかるだろうと、それが国家権力のいう公共の利益優先の思想です」

「そうだな。それがいわゆる善政の思想でもある。が、そうではなく、すべては人民が自分たちでつくるのでなければならない」

「米田団地住民のたたかいも、三里塚の百姓たちのたたかいも、うらがえせば新幹線も空港も自分たちでつくるのだということです」

「いや、それはうらがえさなくても、率直にうけとれば自分たちでつくるということだ。たとえば横浜新貨物線反対同盟のたたかいは、もっとも具体的にそのことをしめしている」

「ですから、体制的な権力機構からみれば異端であるそれら少数者のたたかいは、人民のすべてがやらねばならぬことを一身にひきうけてたたかっているので、その少数者こそが人民のもっとも具体的な姿だといえるのです」

「なるほど、すこしずつわかってきた。だがしかし、そういう少数派のたたかいは力によるたたかいではないといい、さらに敗北をおそれないたたかいだとなると、展望のないたたかいだということになりはしないか」

「勇気とは敗北をおそれないということでもあります」

「それは君、あまりにもあわれだよ」

3　人民は権力も権威も望まぬ

「小田実の有名な虫瞰の思想をごぞんじですか」

「世のなかを大所高所から鳥瞰的にみるのではなく、地にはう虫けらの目で虫瞰的にみる

という、あれだろう」

「小田は乱世に処する文人のあるべき姿をいったのだとおもいますけれども、もともと人民とは権力のまえでは虫けらのごときものでしかありますまい」

「三里塚の百姓たちは〝俺たちを虫けらあつかいにするな〟とさけんだ。国鉄が沿線住民の要求を手前勝手に〝前例〟がないといって一蹴するのも人民を虫けら同様にしかみないので、米田団地住民のいきどおりはそのこと以外ではない。いわば権力は鳥のようにして、虫けらである人民におそいかかっている。とすれば、虫は鳥に対抗するどのような手段があるかだ」

「鳥にたいして虫は、力をもって対抗することはできません」

「いや、そんなことはないとおもう。いわゆる団結という手があるわけだ。虫は一匹一匹としてはあまりにもよわい存在であるけれども、いったん虫が団結してしまえば巨大な力となって鳥はおろか獣でもたおすことができるだろう」

「わたしどもはながいあいだ、その幻想からぬけきることができないでいました。しかし、いまやわたしどもは、団結が人民を解放するものではないことをさとらねばなりません」

「団結が人民を解放しないなんて、君、それは重大な発言だぞ」

「団結が人民を解放しないどころか、むしろ団結こそが人民の解放を阻害しているとさえいえます」

「そんな馬鹿なことが」

「最近、ソ連政府はソルジェニツィンを国外追放にしました。スターリン時代だったらおそらくころされていたでしょうから、国外追放くらいで、まあよかったといえるかもしれません。が、この事実は、ソ連政府が非常な無理をして人民に団結を強制していること、そして、団結の強制がけっして人民を解放するものでないことをしめしています」

「ソルジェニツィンの追放は、じつにけしからんとはおもっている。そして、それはソ連政府が人民に一枚岩的団結をもとめる結果だろう。しかし、わるいのは団結の強制であって団結そのものではないはずだ」

「ところが、つねに強制されるのが団結ではありますまいか」

「そんなことはない。強制ではなくて共鳴された団結というものがなければならない。ソ連のばあい、ソ連共産党の綱領政策にたいする全人民の共鳴があってはじめて一枚岩的団結があるべきなのに、たとえ共鳴はなくても団結だけはせよという強制があるのだ」

「共鳴の強制ということはありませんか」

「あるとおもうんだ。はっきりしたことはわからないけれども、なんだか中国にそれがあるような気がしてならない。例の文化大革命のときに中国をみてきた日本のある三文評論家が、〝あれは砂利革命だ〟といったことがある。つまり、団結ということのかけている点をついたのだとおもう。ということは、団結はあとまわしにしてまず共鳴せよ、というのがあの文化大革命ではなかったか。そして、おなじやりかたの革命がいまでもつづいているようにおもう」

「ソ連は団結を強制しているのではないというでしょうし、中国もまた共鳴を強制しているのではないというにきまっています。が、いずれにしましても、団結の強制と共鳴の強制とがあるという指摘は非常におもしろいとおもいます。そこで、そうなりますと、強制されない団結と強制されない共鳴はどうして可能であるか、ということが問題です」

「それはきわめて簡単なことで、団結も共鳴もそのものの本来にかえりさえすればいいの

だ。はやい話が、労働者は一人ひとりではよわいから団結して労働組合をつくるが、そうしてつよくなるのは労働組合ではなくて一人ひとりの労働者でなければならぬのだ。たとえば、一人の組合員が会社からの不当な処遇に反対してたたかうならば、その一人のために組合は労働者を団結させてたたかわねばならない。ところが、たった一人の組合員のために組合がたたかうことは団結をみだすという理由で、その一人をみごろしにしてしまう例がすくなくない。しかし、これは団結の強制であり、君がいうように労働者の解放を阻害するものだ」

「しかし、また半面では、たった一人の組合員がむちゃな理由でたたかおうというばあいがあるでしょう」

「それにたいしては、共鳴を強制するなといわねばならない。とはいっても、共鳴をもとめることの禁圧はできない」

「よくわかりました。団結を強制するな、共鳴を強制するな、ということは現代の人民解放運動の組織論として重要な意味をもつとおもいます。しかし、いまはさまざまな形で団結と共鳴の強制はいたるところに蔓延しているのでして、しかも、その蔓延のしかたたるやじつにおそるべきものがあります。ですからわたしは、いちいちその実態をあきらかにして槍玉にあげる必要を痛感しますけれども、それはあらためての機会にゆずることにします。そして、いまは一言だけいわせてもらいますと、団結の強制も共鳴の強制もかならず権力を背景にしているということです」

「それはいうまでもない。団結と共鳴は、権力と権威を相手にするたたかいのためであり、それはあたらしい権力、あたらしい権威を樹立することを意味するから、団結と共鳴は権力と権威を志向するものであることは当然だろう」

「ところが人民は、権力も権威ものぞんではいないのです。このことは解放運動にたずさわるものの肝に銘じておかなければならぬことでして、あるときわたしは村会議員として村民に、〝人民は人民の政府をつくろう〟という意味のよびかけをしたことがあります。わたしは大演説をぶったつもりでしたのに、きいていた村民の一人がつぶやくように、〝政治家は権力をほしがるけれども、俺たちはそんなものをほしがらぬのだ〟といったではありませんか。わたしは頭から冷水をぶっかけられたような気になり、その場にへたりこんでしまいました。が、それはまたわたしの目をさましたことばであり、団結とか共鳴とかいうことについて、それまでとはちがったかんがえをもつようになりました」

「ふむ、権力や権威を手にしようとおもわぬものが人民であるとは、なるほど、そうかもしれんな」

「はっきりいいますと、団結や共鳴を人民にもとめるなということです」

「強制ではない団結も共鳴もか」

「もとめるとすれば、それはどうしたって強制になるのではありますまいか」

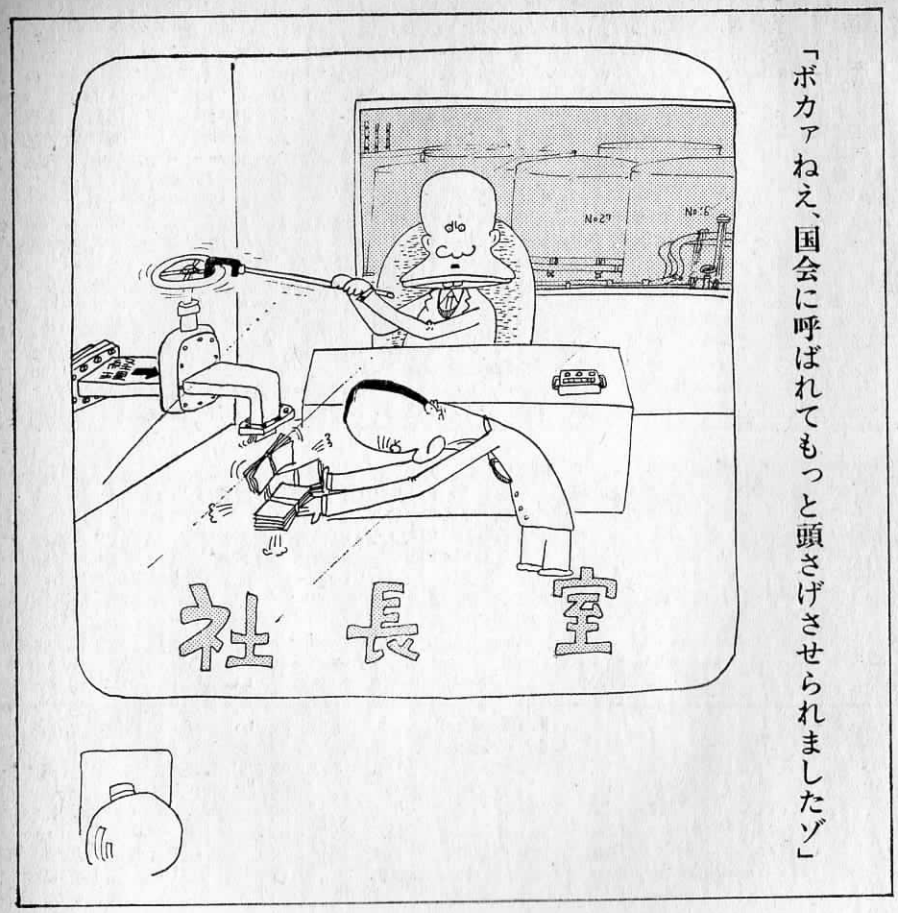
「だからといって、それでは君、何ごともなるようになれ、というようなものではないか」

「もしももとめられるものがあるとしますなら、それは繁殖だとおもいます」

「なんだと、繁殖というたな。それはどういうことだ」

3　団結ではない、繁殖だ

「いま日本の全国には、おそらく何万という地域住民運動体があるでしょう。ところが、それらの住民運動体はまったくのバラバラだといっていいのです。それでわたしは数年まえから、それらの運動体を団結させることは



「ボカァねえ、国会に呼ばれてもっと頭さげさせられましたゾ」

できないものかとかんがえました。いや、そうかんがえたのは、わたしだけではありませんでした。そのためわたしは、全国をすこしはあるきまわりましたけれども、結局は無駄だということをさとったのです。つまり地域住民運動体は、団結とか共鳴とかいう概念の次元とはちがったところで繁殖しているのでした」

「君のいってることがよくわからん」

「具体的にいいますと、三里塚の空港反対闘争が日本の人民にあたえた影響にははかりしれないものがあります。しかし、あの闘争が熾烈をきわめたときに、全国の反権力的勢力が三里塚を中心に団結をしたかというと、けっしてそうではありませんでした。あるいはまた、三里塚の百姓たちに共鳴する声が全国の人民のなかに轟々とまきおこったかというと、それもそうではありませんでした。しかし、それにもかかわらず、三里塚闘争は全国の津々浦々でしずかに繁殖しはじめたのです。いまわたしは全国で数万の地域住民運動体といいましたが、そのほとんどは三里塚闘争が繁殖しているのだといっていいのではありますまいか」

「そうか。君が繁殖というのはそういう意味

だったのか。それならば小田実にならって人民は〝虫けら〟だとすれば、〝虫けら〟の勝利するみちは繁殖以外にないかもしれん」

「そこで、三里塚闘争のことをすこしかんがえてみますと、やはり最初は三里塚でも団結というものが唯一の武器だとされていました。そして、それを武器としてつかうつもりの、政党がのりこんできました。しかし、団結が政党のつかえる武器であるためには、その団結は政党によって強制されたものでなければなりません。しかも政党の強制が持続できる限界は、三里塚の百姓たちのもっともよわい抵抗線となります。ですから、権力にたいしてもっともつよい抵抗をしめす百姓たちは、つぎつぎに異端者として組織から排除されますが、異端者がおおくなれば強制された団結はくずれないわけにいきません」

「しかし、今もたたかってる反対同盟は団結しているだろう。団結小屋があるんだもの」

「わたしはいまの反対同盟のありかたを団結とはおもいませんけれども、あえていうとすれば強制のない団結です。ですから、脱落者がでてもそれは異端者ではありません」

「うむ、僕のきいたところでは、三里塚の反対同盟は脱落者がでるとそれを戦死者とよぶそうだ。かんがえさせられるな」

「また小田実流にいいますと、権力はいつでも〝鳥〟です。〝鳥〟は〝虫けら〟を餌にします。反対同盟の百姓が脱落していくのは、よわい〝虫けら〟が〝鳥〟の餌食になっているのです。ですから、脱落者を戦死者というのは、まさに実態をついています」

「そうすると、どうしても権力の餌食にならないような反対同盟の百姓たちは、〝虫けら〟ではないというわけか」

「いいえ、そうではなく、〝虫けら〟は〝虫けら〟でも、毒虫なんです」

「うーむ、毒虫か。いかな猛鳥も毒虫にはまいるだろう。そういえば、僕は戦車をとめた四人の若者にあったことがあるが、なんとなく顔つきが毒虫の感じだった」

「どうも、人民を〝虫けら〟といい、たたかう若者たちを毒虫といったりするのは、いかにも不真面目にきこえます。しかし、わざわざそういうのは意味があるのでして、それは、人民に団結と共鳴を強制してそれを武器として権力とたたかうものは、権力を奪取して自分がその座にすわろうとしますが、人民が権力と直接たたかうのは権力の奪取をめざしてではないということです。虫は鳥とたたかいますけれども、それは虫が鳥になりたいからではありません。鳥である権力というものを、この世からなくしてしまおうというのです」

「虫はどんなに多数が、どんなに強固に団結しても、それが力となって鳥をたおすことはできない。所詮は毒虫となり餌食としてくわれて鳥をたおすほかはないか。とすれば、〝虫けら〟である人民はあまりにもあわれだ」

「いえ、わたしはかならずしもあわれだとはおもいません。なぜならば、敗北しても敗北してもなおかつたたかうことができるというのが、繁殖する虫の絶対のつよさだからです。伊邪那岐（イザナギ）と伊邪那美（イザナミ）が黄泉比良坂（ヨモツヒラサカ）で喧嘩わかれをしたとき、伊邪那美が〝おまえの国の民を一日に一〇〇〇人ころしてやる〟といったのにこたえて、伊邪那岐は〝おまえが一日に一〇〇〇人ころすなら、おれは一日に一五〇〇の産屋をたてて子供をうませよう〟といいました。わたしは〝一五〇〇の産屋〟という言葉に特別な意味があるとおもいますが、それはともかく、なぜ伊邪那岐は一〇〇〇人をころす殺人者とたたかうといわず一五〇〇人の子供をうませるといったか、ここに農耕民族の繁殖の思想があるといえましょう」

「伊邪那岐はしかし、ころされる一〇〇〇人

に毒をもたせることはいわなかったようだ」

「毒虫の毒とは何か。それは団結と共鳴の強制を拒否することのできるもの、したがって強制をするものにとって毒虫は異端者であり、人民にとっては少数派としての勇者であるわけです」

「だとすれば、とりわけ毒虫が繁殖しなければならぬのだが、その原則となるような方法論があるだろうか」

「繁殖は団結でも共鳴でもないのですから、そういう毒虫の繁殖には前例がないわけではありません。たとえばベ平連の運動、あるいは大学全共闘の運動、それらは団結と共鳴を拒否した運動で、一時はそれによる毒虫の繁殖が猖獗をきわめたことがあります」

「そうだったな。しかし、どういうわけだろう。ベ平連、全共闘による毒虫の繁殖はあれだけ圧倒的だったのに、まるで潮がひくようにやんでしまった」

「しかたのないことでした。ベ平連も全共闘も、それによって毒虫たちが生活をする場をもたなかったからです。ここで生活をする場といいますのは、もちろんそれで飯をくうことではありません。ですからそれだけに、団結でも共鳴でもないところに毒虫は繁殖するものであるという原則は、ベ平連と全共闘によって確立されたといえます」

「ベ平連と全共闘を、そんなにもちあげなくていいだろう。全国のいたるところで繁殖している住民運動はかならずしもベ平連や全共闘の影響をうけず、それぞれはそれぞれに独自のやりかたでやっている」

「それはそのとおりで、繁殖とはまさにそうでなければなりません。そして、それが繁殖は団結でも共鳴でもないゆえんであり、さらに、繁殖する人民が団結と共鳴の強制を拒否できるゆえんでもあるのです」

「ふむ、なかなかうまいことをいうけれども、それにもかかわらずという疑問が僕にはどうしてものこるのだ。それは、権威、富、名声というものにたいして、どういうわけかわれわれはあまりにもなびきやすいということだ。人民に団結と共鳴を強制することのできる権力という鼎の、いわば脚となっているこれら三つの得体のしれないものに、ついわれわれはなびかされてしまう。権力を手にしたいとおもうのが人民ではないと君がいったように、われわれは権威を身につけたい、富をきずきたい、名声をあげたいとかならずしもねがっているわけではない。けれども、たとえばこれは権威だといわれると、われわれはころっとまいってしまうところがある。ひごろ権威というものを軽蔑している小田実に、あるとき僕がミジンコの話をすると、はじめは彼はけらけらとわらっていたが、僕が〝わしは日本のミジンコ研究者五人のうちの一人にかぞえられたことがある〟というと、とたんに僕をみなおして、そしてすぐそのあとで〝なんのかんのといっても、やっぱりおれも権威によわいんだな〟といったことがある。〝やっぱりおれも〟といったところがさすがの小田であって、たいていは〝やっぱりおれも〟とおもわずに権威のまえに平伏しているのだ。これは、われわれにとって決定的な弱点ではないだろうか。そして、人民が〝虫けら〟であるゆえんは、権威、富、名声にたいするこの弱点にあるだろう。だから毒虫とは、権威、富、名声にはけっしてまどわされない〝虫けら〟のことにちがいない。とすれば、単なる〝虫けら〟をどうして毒虫にすることができるか、それが最後の問題でなければならぬだろう」

5　我をとりもどした虫けらが毒虫だ

「人間というものは、どうかすると魂をうば

われるということがあるでしょう」
「そういうことはある。たとえばベートーヴェンの第九交響曲の名演奏をきくと、魂をうばわれるというか我をわすれるというか、うっとりさせられる」
「ベートーヴェンといえば、先般カラヤンという名声赫々たる指揮者が日本にきまして、わたしは彼の談話をテレビできいたことがあります。そのときカラヤンは将来の計画として、録音、録画技術の進歩に期待しながら自分の指揮する演奏を全世界の人びとがいつどこででもきけるようにしたい、という意味のことをいっていました。つまり彼の念願は、最大限に多数の人の魂をうばいたいということのようでした。これをきいてわたしは、カラヤンがむかしナチス党員だったというのはほんとだな、とおもいました」
「ちょっとまて、なにもここでカラヤンがむかしナチス党員だったことをもちださなくてもいいだろう。芸術家ならば誰だって、いかにして万人の魂をうばうかをこころがけているのだから」
「いいえ、わたしはそうはかんがえません。芸術家は誰の魂をうばうのでもなく、自分の魂をうばわれたところを告白できればたりるのです。その告白がもしも誰かの魂をうばったとすれば、そのことは告白への批判でなければなりません」
「しかし、自分の魂をうばわれるところは同時に他の人の魂もうばうだろう、ということがある。それは人間の平等が保証される根拠でもあって、それだから芸術も成立するのだ。とすれば、芸術家が万人の魂をうばうことをこころがけるのを非難してもあたらない」
「もちろん、自分のよしとするところは他人もよしとする、自分のくいたいものは他人もくいたい、それが人間の平等をいう根拠のひとつであります。しかしながら、他人がよしとするから自分もよしとする、他人がくいたいものだから自分もくいたい、ということになるとそれは自由の否定になりはしませんか」
「それはそうなる、しかし、いまの君のいいかたにはすこしおかしいところがあって、なんだかいいくるめられたような気がする」
「そうです。これはいいくるめです。そして、おなじいいくるめを、あなたもつかっているわけです。つまり、自分の魂をうばうところは他人の魂もうばうのであるから、他人の魂をうばう音楽の演奏は自分の魂もうばうものでなければならないと、そのいいくるめが芸術家を名声にはしらせます」
「ふむ、名声のことがでてきたな」
「名声以前のことを、もすこしかんがえてみましょう。
わたしどもは月夜の梅の花をみて、梢でさえずる鳥の声をきいて、うっとりとしておもわず我をわすれることがあります。しかし、すぐにか、やがてか、また我にかえってわすれた我をおもいだすときに、それが芸術になるのだとおもいます。おなじように、演奏家が聴衆の魂をうばうのはいいですけれども、やがて聴衆が我にかえったときにおもいだすのは、うっとりとしていたときの聴衆の我でなければならず、名演奏とはそういう演奏でなければなりませぬのに、名声にはしる演奏家は演奏者をおもいださせようとします」
「なるほど。君のいってることがすこしはわかるようだ。してみれば、さきほど僕は〝虫けら〟である人民が名声になびくことをなげいたけれども、じつはなびかせられているわけだな」
「以前は座頭だとか瞽女だとかが田舎まわりをして、名演奏ともいえないのにおなじものばかり演奏していました。きくほうでも、あれをやれこれをやれという注文はあまりしなかったのです。きまったさわりで、あたらしい涙をながしていました。それは我をわすれることをくりかえし、とりもどす我をあたらしくしていたのです」
「名声のたかい芸術家には、つぎつぎにあたらしい仕事をやらせようとするが、たとえば小説に感動して我をとりもどすのではなく作家をとりかえそうとすれば、結局はそういうことにならざるをえまい」
「学問にしても芸術にしても同じことですが、名声のたかい学者や芸術家は、つねに人民を我をわすれた状態におこうとつとめます」
「すなわち、名声とは人民への裏切りであると、そういいたいのだろう」
「いいえ、そうまでいおうとはおもいません。けれども、明治以後の日本の文人たちはつねに名声をもとめ、それを多数派志向といってもいいですが、そのため人民に我をわすれさせるという形で人民からうきあがっていったとはいえます。つまり、日本の文人たちがとらえた人民は、我をわすれた人民でしかなかったのです。ですから、人民が我をとりもどしたときには、名声のたかかった文人たちははるか雲のうえか、さもなければドブのなかにおっこちていました」
「いま君は文人といったが、知識人といってはわるいのか」
「わたしのいう文人は知識人とはだいぶちがいますけれども、いまそのちがいまで説明しなくてもいいではありませんか」
「めんどうなら、それでもいい。が、これまでの文人は人民に我をわすれさせるところで名声をえていたという君は、それではこれからの文人はどうあるべきだとおもうか」
「なにはともあれ、名声との絶縁をはからねばなりません。さきほどあなたは権威、富、名声に人民がなびくといわれましたが、もはや権威や富について話をするいとまがなくなりましたので一括していいますと、権威も富も名声とおなじように、人民に我をわすれさせるものとしてあるのです。権威に目がくらむ、富に目がくらむという言葉は、そのことをしめしています。ですから、ほんとうの文人のなさねばならぬことは、人民に我をとりもどさせること以外ではありません。そのためにはまず、文人は権威、富、名声から自分自身をとおざける必要があります」
「隠者になってしまうことか」
「そうです。もともとアジアでは文人と隠者とは同義語だったのではないでしょうか」
「僕も隠者になりたいな」
「でしたら、この文章の原稿料ももらわないがいいです」
「そんなことはないよ。権威あり富あり名声もある人の原稿料の、これは倍くらいもらわねばならぬ。そしたら、君には半分やることにする」
「なにをいってるんです。わたしはほんとうの隠者ですから一銭もいりません。霞をくってもけっこういきていける身分です」
「君はそれでいいかもしれんが、生身の人間である隠者はそうはいかん」
「ほんとうは、生身の人間である隠者は飯をくわねばならぬから、さらにけっこうな身分でなければなりません。なぜならば、それだからつねに人民とともにあることができます。権威、富、名声という脚にささえられた権力は、たえずそれによって人民に我をわすれさせ、その我をわすれた人民を多数派として、団結と共鳴を強制する手形にします。隠者である文人は人民とともにあって、人民に我をとりもどさせて〝虫けら〟を毒虫として繁殖させなければなりません。やがてそれが、〝さよなら、にっぽん〟となりましょう」

イラスト　岩本久則

日本への三下り半

天皇の家畜に

松井不朽

日本を真に人間にとって住み心地のよい平和的な住家とするためには、イヤがオウでも天皇制と天皇を解剖して国民を悪夢から目覚めさせねばならぬ、と信じた私は、今日まで五十年間にわたって、天皇神格病にとりつかれているあわれな家畜病患者に対し、アラユル投薬を試みたが仲々効能が表われそうもない。昔から「習慣は第二の天性」と言われているが、一旦家畜化されたドレイと化した以上二代や三代では解消するものではないらしい。敗戦によって君主国日本から主権在民の民主日本に生誕し私共が天皇に代り主権者となった今なお、家畜化されたヤバン日本人は連綿として生きている。

恐ろしい哉、天皇ゴジの保守政治は益々猛威をタクマしくしつつあり、いつの選挙でも自民党万々歳であって、これは多数の家畜国民の支持を受けている証拠だろう。これに反して天皇制打倒を旗印にしていた共産党が仲々伸びない。それは天皇ゴジの家畜国民の反感を買っていたからである。最近の共産党もこれに気付いてか小利巧になり、天皇制打倒をクチにしなくなったので、得票率も支持者も増えてきたが、このことは長い目から見たら共産党のダラクであり失敗である。真に日本を平和にして文化的な国家にするためにはナニをおいても理性を喪失して実畜に転落した日本人の血を昔通りの人間の血に入れ換えることが先決である。

私は今日迄、何者も恐れず天皇制に挑戦したために牢にもブチ込まれたし、戦争中は憲兵隊の営倉にもブチ込まれた。およそ時の権力者を相手として闘わんとすれば、アラユル迫害を覚悟せねばならぬ。明治天皇の御真影と称して全国学校に配布した写真なども真ッ赤なニセモノで、それを生徒に拝ませていたが、晩年の猫背の天皇がホンモノである。皇紀二千六百年云々もウソ八百のゴマ化しだったし、百二十三代にわたる皇統連綿とか万世一系と称するのもデタラメである、例の伊勢神宮が天皇の祖先を祀っていると言うのも大ウソだ。もちろん、神武天皇も天照大神云々も子供ダマシの神話だ。科学万能の今日、誰も信用しないが家畜化された日本人だけが信用しているようだ。

とにかく一切合財が古事記から引用して御用学者共がデッチ上げた天皇史である。こんなふうに天皇史や日本歴史を解剖すれば際限がないが、人々を侵略戦争に馳り立てた戦犯の元兇ヒロヒトを今なお有難がって新年には参賀と称して皇居に押しかけ天皇陛下万歳を唱えたり君が代までも歌いながら戦前同様の元首（主権者）扱いしているのだから無智ヤバン迷信日本人につけるクスリは天皇丸よりないらしい。

こんな日本人と同席して暮すことは堪えられぬ。もし大陸続きの日本だったら私も外国に逃避していたであろうが、そこは島国の悲しさである。セメテ三行半を叩きつけて気の合った同志と語るぐらいが関の山である。牧伸二ではないが、ああ、イヤになっちまった。一日もこんな日本に住みたくないのは私一人ではないだろう。人間をメザス日本人だったら同感だろう。